

「きっと誰かと心を通わせること。

そのものを指して、生きるって呼ぶんだよ」

『君の臍臓をたべたい』より

2016年の本屋大賞にもノミネートされて、その後、映画にもなった住野よ
著『君の臍臓を食べたい』という本の中に出てくる言葉です。

高校生の主人公が、偶然病院でクラスメイトの女の子の日記帳を拾います。
「共病日記」というタイトルの日記帳には、女の子が臍臓病気におかされ、余命
が限られていることが書かれていて、その事実を知ります。その後2人は、女の子
の望みを具体的に実現しながら、心を通わせ、互いの存在を大切に思いながら
生きることの意味について向き合っていきます。その中で、主人公が、女の子に、
「生きるとは…」と問い、その答えとして、彼女が答えた言葉がこの言葉です。

「生きるってのはね、きっと誰かと心を通わせること。そのものを指して、生きる
って呼ぶんだよ。誰かを認める、誰かを好きになる、誰かを嫌いになる、誰かと一緒
にいて楽しい、誰かと一緒にいたら鬱陶しい、誰かと手を繋ぐ、誰かとハグをする、誰
かとすれ違う。それが、生きる。自分たった一人じゃ、自分がいるってわからない。
誰かを好きなのに、誰かを嫌いな私、誰かと一緒にいて楽しいのに誰かと一緒に
いて鬱陶しいと思う私、そういう人と私の関係が、他の人じゃない、私が生きてる
ってことだと思う。私の心があるのは、皆がいるから、私の体があるのは、皆が触っ
てくれるから。そうして形成された私は、今、生きてる。まだ、ここに生きてる。だから人
が生きてることに意味があるんだよ。自分で選んで、君も私も、今ここで生きてる
みたいこ。」

物語の中の言葉ですが、生きるということを問われるときにとても響くメッセージ
であるように思います。誰もが、一人で生きられるものではなく、人と出会い、人を
認め、認められ、人と笑い泣き怒りながら生を全うしていく。そして、多くの関わり
合いの中でこそ、自分をはっきりさせることができるように思います。当たり前のこと
かもしれませんが、そのことを確認することが、とても大切に思います。